

けるというケアリングの倫理を大切にしてケアを提供することを心に誓いました。
私の行為が『看護』になっていなかったことに気づかせてくれたAさんと奥様に、心から感謝しています。ありがとうございました。

23年前の母の思い出

「私を栄養へ向かわせた原体験」

藤田 繁雄

ふじたクリニック 医師



私の生家は商売をやっている、決して裕福ではない家庭でした。母は常に働き続け、ないはずのお金をどこからか運んできて私の教育にかけてくれました。浪人して

ようやく入学した大阪大学医学部も、夢中になった登山をしている間に留年が決まり泣かせてしまったり、そのほとぼりが冷めたら今度はネパール遠征に行ってくると言い残して4カ月音信不通になったりと、何をしでかすかわからない私の母親をするのは大変だったろうと思います。

母は昭和45年にベーチェット病を発症し、私が小1の頃から入退院を繰り返していたことが、医師になろうと決めた大きな動機です。ようやく医師となり、これから母を楽にできると思っていた矢先、母の胃がんが判明しました。卒後2年目の研修先の病院で手術をしました。が、腹膜播種の状態、手の施しようがありませんでした。

退院後は、何を食べても下痢ばかりして、体重は見る間に減っていき、悪液質以上に経口摂取が低下していることが原因なのは、私でもわかりました。そこで、毎日出勤の6時前に末梢ルートを取って、アミノ酸含有ブドウ糖液500mlに脂肪製剤を投与して、23時の帰宅後にまた同じことをやって、少しでもADLがよくなるか、新米医者なりに考えました。長い闘病生活で母の静脈は非常に細く、24Gもなかなか1回で血管確保できず、母親の身体に針を刺すのはこんなにも辛いものかと思ひ知らされました。結局、術後4カ月で永眠しました。

その半年後に井上善文先生がアメリカから私の研修病院に来られ、CVポートの存在を知りました。末期のがん患者さんにも積極的に導入されているのを見て、自分の知識のなさで母に毎日痛い思いをさせてしまった、しんどい目にあわせてしまった、自責の念に何年も苦しみました。先輩医師は何も教えてくれなかったし、彼らは何も知らなかったのです。

CVポートは今や、化学療法によって誰しもが知るメソッドになりましたが、20年前はほとんど知られておらず、在宅静脈栄養に取り組んでいる医師だけが知っていたデバイスでした。医師にとって知識の欠如は犯罪行為なのだと、母が教えてくれました。

医師として正しい知識と適応を身につける、どの分野でも当たり前ですが、NSTをやっていると、自分の専門領域以外は全く興味もなく、栄養に関する知識が全くない輩に出会います。その知識のなさで、患者さんの予後を悪くしていることも気づかず…。

井上先生と仕事をするようになって22年になりました。不詳の一番弟子の私は、文字通り手取り足取り栄養療法の基礎から指導頂きました。私にとって医師としての理

想形が井上先生で、いつかこの人を超えたいと私なりに努力してきましたが、恩返しもしないまま、2015年12月に開業しました。ですが、地域医療にこそ、栄養療法の生かせる分野も多いと予感しています。

母の教えてくれた医師としての心得を胸に秘めて、自分の知識を総動員して、地域の皆さんを笑顔にする努力をしていきたいと静かに闘志を燃やしています。

栄養管理についての私の個人史

井上善文



「栄養管理は大事だ、静脈栄養も経腸栄養もちゃんと実施できないと外科医として活